

隅田公園の歴史的変遷—臨水公園の設計思想と空間の変化

The historical transition of Sumida Park –Its history of design concepts and space as a riverside park

服部 洋佑** 佐々木葉***
by Yohsuke HATTORI · Yoh SASAKI

帝都復興事業によって整備された隅田公園は、水辺と言う立地特性を活かした公園道路や遊歩道の設計が行われた個性的な公園である。しかし整備後 70 年以上が経過する中で河川および都市の環境が変化し、公園も大きく変容してきた。本論文では、公園整備のみならず外郭堤防や首都高速道路 6 号線の建設といった公園事業以外による影響を受けながら変化してきた過程を図面と年表によって整理し、その変化の特徴とそこに読み取られる設計思想の変遷を明らかにした。その結果開園時に認められた設計思想が具体的な設計の目標と整備内容によってどのように継続、消失、再獲得されていったかを把握することができた。

1. 研究の背景と目的

公園は都市環境の中で、人々が休息、散歩、観賞、運動などを楽しめるような「利用効果」と、災害時における避難所・延焼防止帯としての「存在効果」がある。また、都市住民のレクリエーション空間の確保、美しい都市景観の形成等の多様な機能を有している¹⁾。

公園の必要性に関する議論においては 1923 年の関東大震災が大きな転機となった。後藤新平を中心とした帝都復興計画の中で、折下吉延により震災復興三大公園が設計される。「隅田公園」もその 1 つであり、震災の影響を反省し「非常時の群集の避難地」や「延焼防止帯」をつくることは言うまでもなく、「名所古蹟の保存」や「運動施設や遊技場を出来るだけ公園敷地内につくる」ことも考えられた。また、隅田川沿いの「臨水公園」に相応しい公園道路（ブルバール）・遊歩道（プロムナード）などの設計がなされる。公園内に野球場・陸上競技場・プールなどのスポーツ施設を組み込むことは、当時としては近代的な公園設計として注目を浴びることになる。

しかし、公園は社会状況や人々・時代のニーズにより影響を受けやすい柔軟な空間ストックである。つまり、他の都市施設を収容できる広大な空間ストックを持つ。現在の隅田公園には数多くの施設が立ち並び、複雑な園路を有している。公園と河川との間には通称カミノリ堤防が立ちはだかり、首都高速道路 6 号線は公園敷地内を縦断する形で開通した。このように隅田公園は開園当時の魅力を失ってしまった。

そこで本論文では、臨水「隅田公園」がどのような歴史的変遷を経て現在に至っているのかを以下の 2 点から明確にする。

- (1) 施設・植栽・園路の歴史的変遷を図面や年表を作成して視覚的に捉える。
 - (2) 設計思想の変遷と公園整備成果を把握する。
- つまり設計思想の変遷を時系列的に示すことで、どの時期に思想が潰えてしまったのか、あるいは活かされてきたのかを明確にする。以上の結果から設計思想が公園整

備に与えている影響をまとめ、公園という社会資本のあり方や整備改修の方向性を考察する。

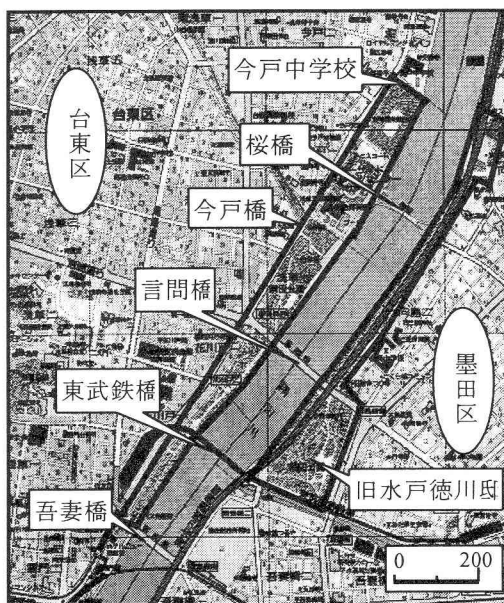


図 1 隅田公園の周辺地図

2. 調査分析の方法

震災復興期に至る公園の設計論や歴史的系譜については、小野良平「震災復興期に至る公園設計の史的的研究」²⁾により整理分類されている。また石川幹子「ニューヨークにおけるセントラル・パークの 19 世紀末以降の変遷と再生に関する研究」³⁾では、海外の 1 つの公園についての歴史的変遷を研究している。しかし、日本の 1 つの公園に限定して開園時から現在に至るまでの歴史的変遷を扱った研究は見出せなかった。

そこで、本論文では、震災復興大公園として誕生以来、長期にわたって利用され続けている、また土地固有の特性（臨水）を活かして設計されているという特色を有した隅田公園を対象として、公園の設計思想、施設、植栽、園路を調査し、その歴史的変遷を明確にする。

* Key Words : 隅田公園、歴史的変遷、設計思想、場所性

** 正会員 国土交通省 *** 正会員 博士 (工学) 早稲田大学理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1)

そのため、隅田公園⁴⁾、帝都復興事業誌⁵⁾、都市公園⁶⁾、東京都市計画物語⁷⁾などの文献から、隅田公園・隅田川・周辺社会状況などの項目を調査するとともに、管理者である台東・墨田両区役所へのヒアリング調査、現地調査を行う。

3. 隅田公園の歴史の変遷

まず計画案の策定過程などから当初墨田公園がどのような設計思想のもとに設計されていたかを確認し、その後、現在までにいたる出来事を整理して年表と図面にまとめる。

3.1 開園時の設計思想

1923年の帝都復興院理事会で決定された政府原案中の「公園設置理由書」では、次のように述べられている。

「隅田川上流兩岸にして大体吾妻橋附近より白鬚橋附近に至る沿岸に道路公園を設定せむとす。是れ平時に在りては四時行楽の地となり一朝非常に際しては群集の避難場たらしめんとす。殊に此の地は古来史蹟に富めるが故に此等旧蹟を保存すると同時に、東京随一の臨川公園たらしむを得へし」¹¹⁾

しかし、帝都復興計画が圧縮されたことにより、上記の長さは達成されずに大幅に短くなった。そこで、旧徳川邸の買収、施設移転、台東・墨田区両岸埋め立てなど、6度にわたる公園区域の変更が行なわれた。

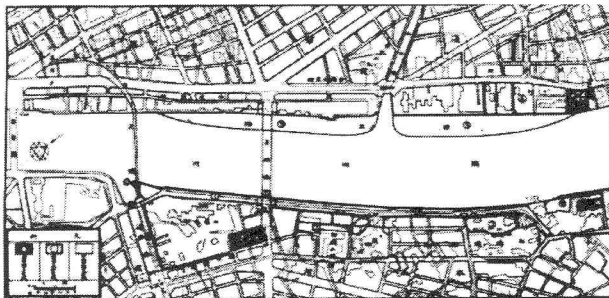


図2 隅田公園区域変更経過図¹²⁾

この6度の公園区域の変更の内容をみると、

- (1) 震災復興公園としての誇り
- (2) 浅草区(台東区)と本所区(墨田区)の面積均衡
- (3) 臨水公園に相応しい水辺の厚み
- (4) スポーツ施設を設置しうる十分な面積確保
- (5) 公園の連続性の確保

を目指していたことが読み取れる。また、特別都市計画委員会の総会で直木倫太郎復興局長官は、

「従来の公園風の公園を造ることは避けまして、新しく造る公園の設計は出来るだけ運動場、遊戯場等の方面に使はれるように設計したいと思っております。唯隅田公園は幅が狭くて用地が取れませぬが、併し昔から名所戸蹟に富んで居ります。(中略)水の見渡せる気持ちの裕かになる公園を設けて置くことも必要と考えまして、此公園を設けることに決定したのであります。(下略)」¹³⁾

と公園位置、選定理由、目的を明確にしている。

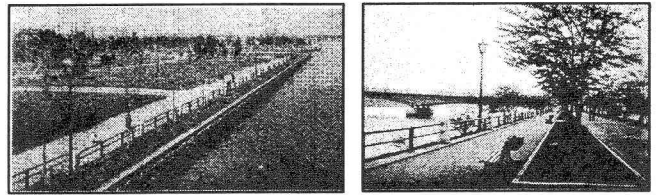


図3 開園時のプロムナード¹⁴⁾

以上より、開園当時の設計思想として、①「防災機能」の確保、②水辺や旧蹟といった「場所性の尊重」、③帝都復興の象徴といった「シンボル性」、⑤運動施設などの多様な「機能付加」があったと考えられる。

3.2 隅田公園の歴史と空間の変遷

隅田公園の施設・植栽・園路整備の変遷や周辺社会状況が、一体どの時期にどのような部分で行われたのかを表1に示す。その際、台東区側はAからDの4ゾーンに区分し、墨田区側は1つのゾーンとして示した(図4)。

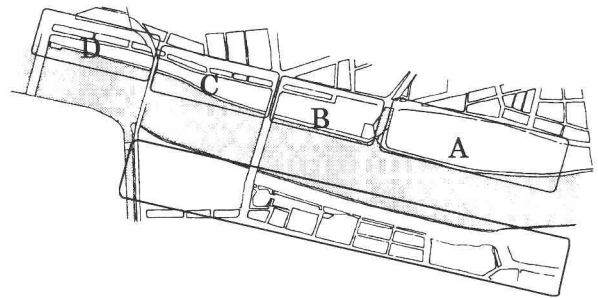


図4 隅田公園のゾーン区分

表1から分かることは、園内の整備改修(◆印)時期が1960年前後と1980年前後に集中していることである。図5に施設や空間の変化がわかる記述や写真にもとづいて図面を作成した。なお紙面の都合で図5には7時点の図面のみを示したが、開園時から2000年までで計15枚の図面となり、その変化のめまぐるしさがわかった。これをみると運動施設などの敷地内での移転、改修と次に述べる都市環境の変化の直接的な影響とおよび公園というオープンスペースに都市施設が挿入されるに伴う変化があることが分かる。

1960年前後の整備改修は、高度経済成長期の過剰な地下水の汲み上げや、台風による洪水・高潮といった自然災害の防災対策として建設された外郭堤防により盛土整地を余儀なくされたことによる。またその結果、臨水公園としての価値が失われ、河川と独立した園路植栽へと推移していった。

1980年前後の整備改修は、1975年に隅田公園が区へ移管されたことや1977年の「台東・墨田区の姉妹区締結」がきっかけとなっていることが読み取れる。開園当時の設計思想の復活を目指して、両区が連携して整備を行う。台東区側では、外郭堤防により河川を見渡せる位置は堤

表1 周辺社会状況と隅田公園の歴史年表 (参考文献4)~9)を元に著者作成)

	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	
社会状況		<ul style="list-style-type: none"> 地下防空壕を設置 (43) 蟻の町の出現 (45) 公園緑地課が非常廃体処理事務を行う (44) 戦争のため 早慶レガッタ中止 (44~46) 	<ul style="list-style-type: none"> 蠶の町完全撤去 (60) 水質悪化、レガッタ中止 (61) 花火大会が防災上中止 (61) 花火大会復活 (78) 全面的な園内整備 復旧5ヵ年計画 (58) 都市公園法が施行 (56) 東京都市計画公園緑地の大改訂 (57) 外郭堤防建設促進大会 (55) 隅田川外郭堤防建設開始 (57) 東京都制が施される (43) 	<ul style="list-style-type: none"> ■首都高速道路6号線が公園を縦断 (71) ■首都高速道路6号線向島ランプの開通 (82) ■早慶レガッタ復活 (78) ■花火大会復活 (78) ■隅田公園は都から台東・墨田両区へ移管 (75) ■隅田川マラソン、駅伝大会開催 (79) ■墨田区政30周年記念事業 (77) ■墨田区と台東区が23区初の姉妹区の締結 (77) ■台東区側防潮堤建設 (61~66) ■台東区側防潮堤建設 (65~67) 					
台東区側	A	<ul style="list-style-type: none"> ○児童遊園 (31) ○競技場 ○大プール (31) ○少年用プール (32) ○児童公園移設 (38) 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童公園の位置に野球場設置 (38) ○競技場と大プール間にテニスコート4面 (35) ○台東体育館の設置 (57) 	<ul style="list-style-type: none"> ○テニスコートと野球場移設 (57) ○台東体育館の設置 (57) ◆盛土整地・柵・外灯整備 ◆園内植栽整備 (60) ◆今戸水門 (山谷堀水門) の設置 (67) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆少年野球場裏の緑化整備 (79) ○テニスコート4面から5面へ増設 (80) ◆日本初の公園橋「桜橋」誕生 (85) ◆両岸にテラスの整備 ○桜橋モニュメントの設置 (95) ○台東区リバーサイドスポーツセンター設置 (83) ○プール改修、大・小・変形プール設置 (78) ◆野球場・競技場の整備 (75) ◆野球場整備 (81) ◆今戸水門 (山谷堀水門) の裏が完全に埋め立て (85) 				
	B	<ul style="list-style-type: none"> ◆言問橋北の植え込み整理 (33) ○ラジオ塔、屋外ステージ広場設置 (38) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆護岸かさ上げに伴う 盛土整地・園内改修 (59) 	<ul style="list-style-type: none"> ○水門近くに少年野球場設置 (74) ◆築山の改修 (78) ◆言問橋下の整備 (82) 					
	C				<ul style="list-style-type: none"> ◆言問橋~東武鉄橋 (77) 護岸緑化・利殖・盛土・石積み・スロープ設置 ◆東武鉄橋~今戸水門整備 (81) 利殖・舗装・緑石・石積み・モニュメンタルゲート 花壇・桜植栽・遊具・ツリーサークル・藤棚・休憩所・時計灯など 				
	D				<ul style="list-style-type: none"> ◆吾妻橋~東武鉄橋整備 (79~80) 利殖・舗装・滝・ツリーサークル モニュメンタルゲート・水飲み場 公園灯・石碑など ○公園地下に駐輪場とリバーサイド ギャラリーを設置 (94) 				
墨田区側	<ul style="list-style-type: none"> ○幼年・少年・青年用児童遊園 (31) ○帝大艇庫 (31) ○テニスコート2面 (31) 	<ul style="list-style-type: none"> ○少年野球場 設置 (49) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆施設・植栽整備 (60) ◆施設・植栽整備 (59) ○大学艇庫取り壊し (67) ○墨田区立温水プール体育館設置 (73) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆日本庭園の全面改修 (77) ○幼年用児童公園が釣り堀変更 (78) ○桜橋デッキスクエア完成 (92) ■墨田区役所新庁舎 ■すみだリバーサイドホール完成 (89) 					

○: 公園内の施設
 ■: その他のインフラ
 ◆: 整備・改修
 □: 法令

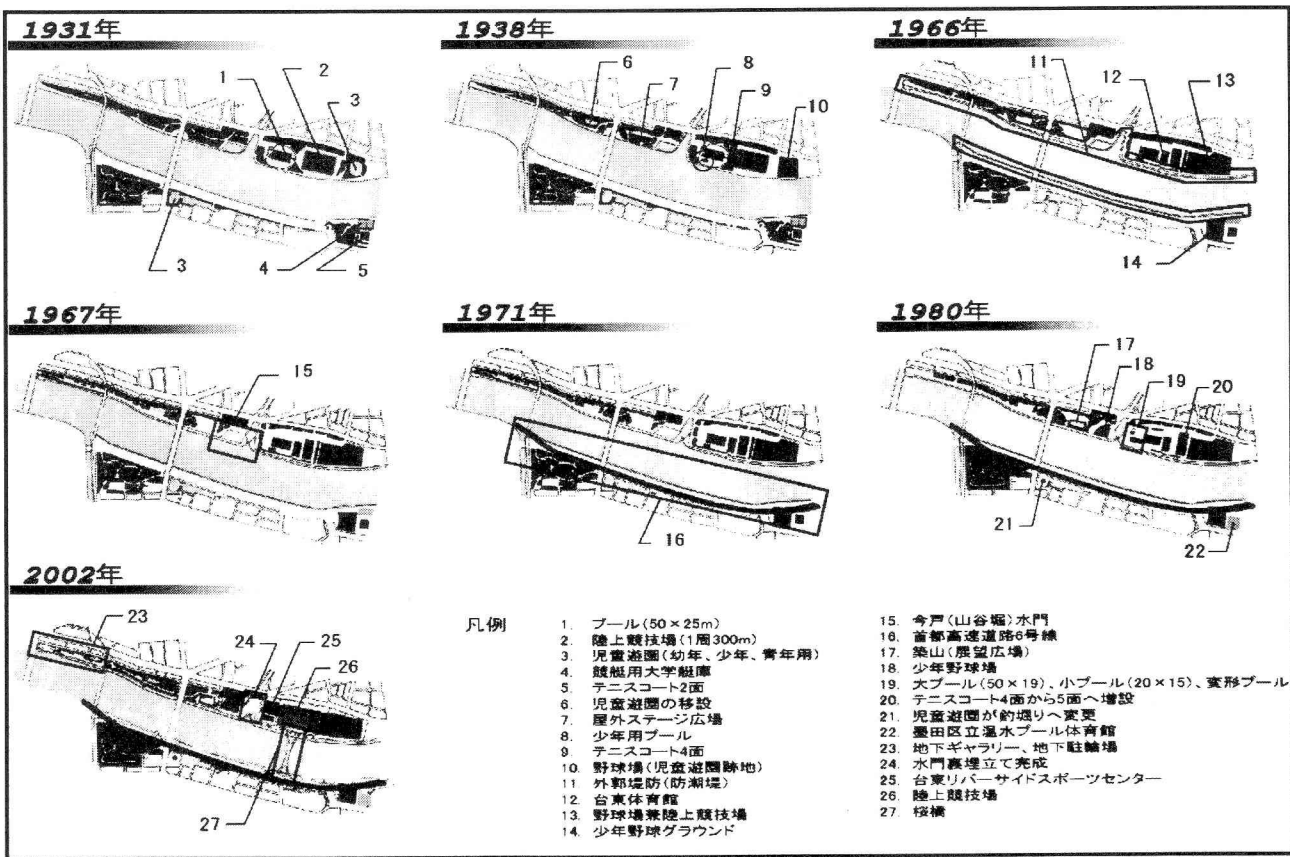


図5 隅田公園の空間の変遷 (参考文献4)~9)を元に著者作成)

防上のみであったため、展望広場の設置を行った。図6、7にみられるように現在では展望広場付近には階段やスロープが複数存在している。このような複雑な園路が出来上がったのは、展望広場という点的な施設への動線を局所的に考慮した結果であると考えられる。

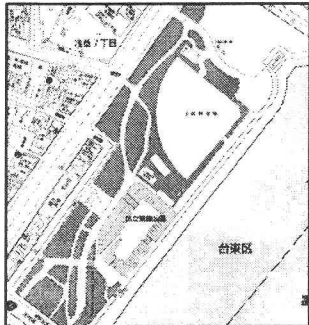


図6 展望広場への動線¹⁵⁾

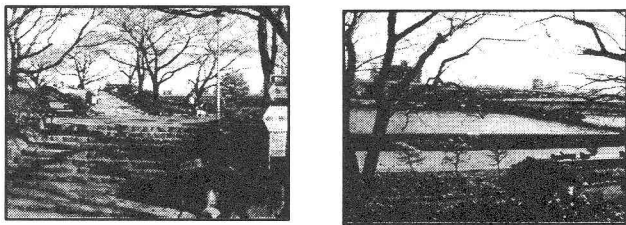


図7 展望広場への動線と展望広場から見た河川

4. 設計思想の変遷と整備成果

表1や図5で明示的に示した隅田公園の整備の変遷と空間の変遷をもとに、以下に、隅田公園開園時から現在に至るまでの設計思想の変遷、設計意図・目標、達成された整備（施設、植栽、園路）、獲得された成果を整理し考察する（図8）。

隅田公園開園時の設計では、震災復興公園として、つまり防火機能としてのオープンスペースが求められ、河川沿いという場所性を活かした道路公園（ブルバール）や水辺の遊歩道（プロムナード）を有して誕生した。また、野球場・陸上競技場・プール施設といったスポーツ施設が公園内に組み込まれたことは画期的であり、人々を惹きつけた。

しかし、外郭堤防の建設、首都高速道路6号線などの外的要因により、防災機能や利便性を獲得することが出来た反面、隅田公園の一番の魅力である「臨水という場所性」が失われてしまった。このことからさらに、河川と独立した園路設計が行われるようになり、河川沿いのシンプルな直線園路は複雑化されていく。首都高の開通では「水上運動の中心」¹⁶⁾として活躍してきたボートの置き場であった大学艇庫や墨堤の桜並木といった「シンボル」も奪われてしまった。この時期は「隅田公園の受難」と呼ばれ、開園当初の設計思想は失われてしまったといえる。

しかし1973年に、東京都によってつくられた隅田公園基本調査並びに改造計画では、河川を見渡せる公園の復活を目指し、75年の区へ移管、77年の姉妹区締結をきっかけとして、両区は「場所性」を取り戻そうと「親水性」をキーワードに協力し合うようになる。桜橋や親水テラスは73年の改造計画を原案としており、親水設計としては先駆的であったと言える。このことは、隅田公園親水テラスの成果を確認した上で、東京都では隅田護岸全体を「傾斜型護岸」にする計画を立案したことからもわかる。また管理者が別れて以降も両区で連携して整備を行ったことにより、開園当時の4つの設計思想を取り戻す整備成果を挙げる事ができたといえよう。

1982年に開通した向島ランプにより、交通量を増大させてしまったことや、場所性を奪ってしまったという負の効果があることは否定できない。しかし、この向島ランプをきっかけとして「臨水公園としての場所性」を考慮に入れた桜橋デッキスクエアが作られた。交通安全対策としての機能を果たすと同時に、「首都高や都道により分断された墨田区側の公園の一体化」や「桜橋・隅田川を見渡す展望台」としての役割も期待されている。つまり、ランプの開通によって失われた場所性の代償として、桜橋デッキスクエアが構想されたと言える。

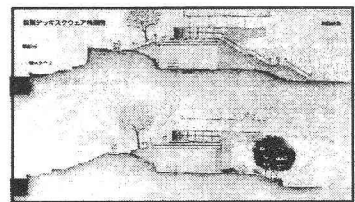


図9 桜橋デッキスクエア断面図¹⁷⁾

その設計条件からもたらされる空間の質やデザインの洗練性に問題が残るが、代償行為によって負の影響を緩和しようという意図は見て取れる。

また、浅草駅周辺の放置自転車対策への要望が区民から挙げられたのを契機として、隅田公園内の地下に駐輪場が建設される。臨水公園の「場所性」とは関係のない「機能付加」が行われたとみることができるが、過密化する都市のなかで、公園が単に都市施設の受け皿として用いられるといったことがここにも見られる。しかし同時に博物館やお花見広場といった歴史性、場所性を付与するための再整備計画が作られている（表2）。これらも一種の代償行為とみなすこともできるが、具体的に整備された施設や空間の質によって、その成果は設計思想を具現化したものであるかどうかが決まると考えられる。

表2 隅田公園再整備計画による立体利用¹⁸⁾

ゾーン	対象エリア	テーマ	地上部	地下部
A~B	桜橋～ 言問橋	イベント・スポーツレ クリエーション	公園管理事務所 多目的グラウンド 水上ステージなど	地下駐車場 健康運動施設
C	言問橋～ 東武鉄橋	歴史散策	博物館 遊戯コーナー お花見広場、桜並木	—
D	東武鉄橋～ 吾妻橋	エントランス (浅草の玄関口)	エントランス広場 水上バス乗場 レストラン、休憩所	駐輪場

【出来事】

【設計思想】

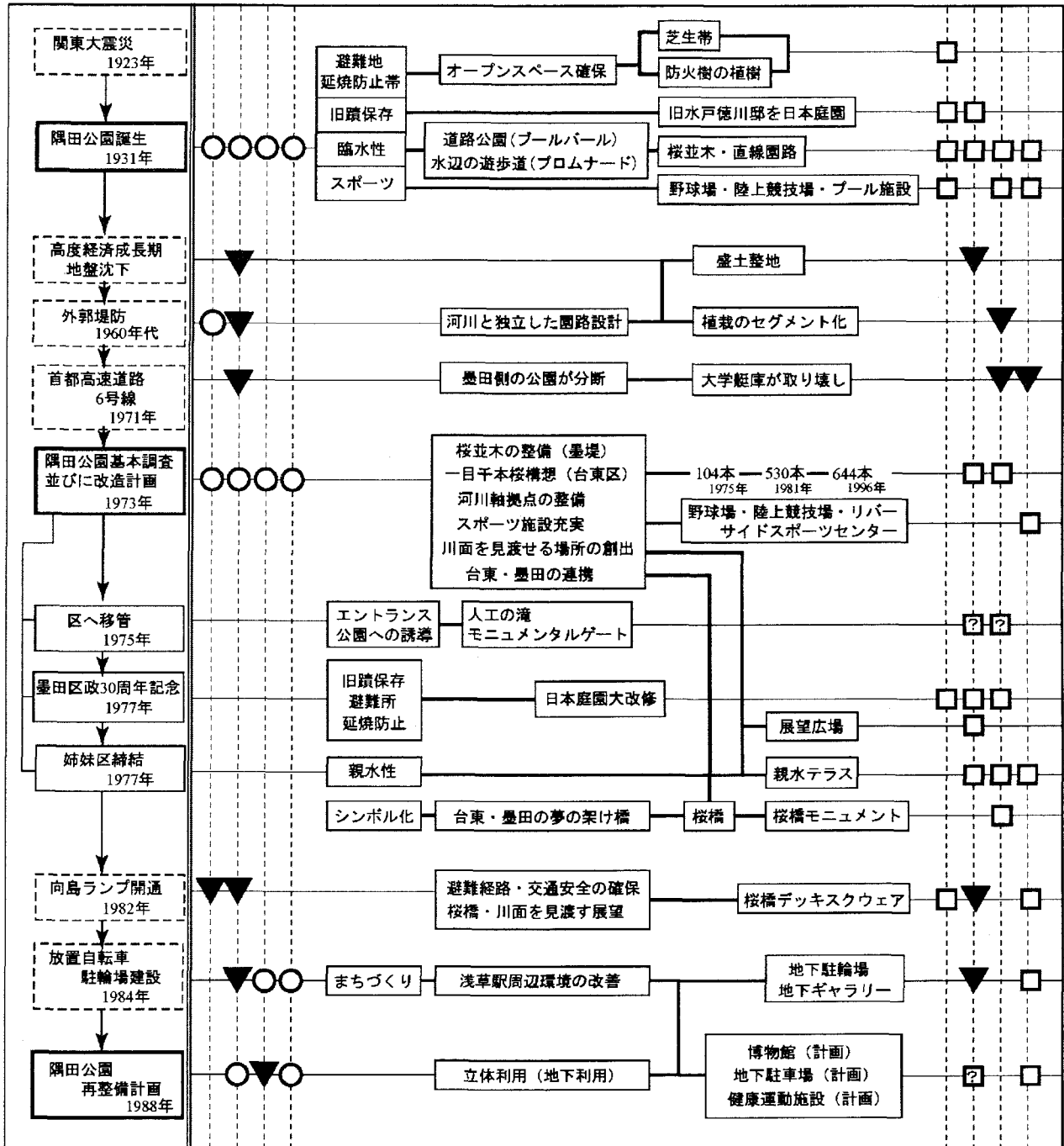
【設計意図・目標】

【整備（植栽園路・施設）】

【整備成果】

場所
防災機能
シボル性
機能付加
の尊重

場所
防災機能
シボル性
機能付加
の尊重



- 凡例
- : 求められた設計思想
 - ▼ : 失われた設計思想・特質
 - : 整備により獲得・補填された機能・特質
 - ◻ : 公園整備計画・事業
 - ⋯ : 公園整備に影響を与えた外的要因

図8 設計思想の変遷と整備成果

5. 結論

本研究では隅田公園の歴史の変遷を、年表（表 1）と図面（図 5）を作成することで一元的に把握できるようまとめることができた。それらから墨田公園が非常にめまぐるしくその姿を変えてきたことがわかった。水辺と言うオープンスペースに隣接した陸の線状のオープンスペースと言う魅力的な立地特性を有した公園が、その特性ゆえに様々な施設を受け入れるとともに、それによる局所的な改修や代償行為が重ねられていった。その結果、全体をつらぬくような明快な空間の骨格構造が失われ、切り張りされた「幕の内弁当」¹⁹⁾のようなプランを持つオープンスペースへと変遷していった。しかし、個々の計画には、それぞれ意図、目的があり、特に 1970 年代後半以降の整備は、開園時の設計思想を再度獲得しようとしているように見えるものが多い。しかし、その具体的な設計、デザインの質にその効果は依存する。またやむをえず負の影響を与える改修が行われた場合には、その代償行為となるような整備がなされることもあるが、その効果については前述同様、具体的な整備の内容が問われるといえよう。

以上の変遷の具体的な内容から、公園という空間ストックは、変化していく都市環境を維持し、その影響を受け止める一種のバッファゾーン的な使われ方をしてきたことがわかった。こういった機能的役割も公園本来の機能の一つと考えられなくもない。現に昨今では、ホームレスという社会的なひずみから派生したひとつの状況を受け入れる空間として実質的に機能している。しかし、やはり公園には、開園当時に見られたような文字通り魅力的な空間としての質を如何にそれ自体の変化のなかで維持していくかを考えるべきであろう。その際には、場所性という物理的にその場所の特性と結びついた特色を基調とすること、また歴史的な蓄積の中でできうる限り設計思想の継続性を図ることなどが必要と考えられる。

なお今回は物理的な変化を追うことが中心となり、使われ方、人々のイメージなどの変化を十分把握していない。また物理的な変化についても、公園に隣接する地区の町並みや用途の変化、また周辺地域全体の都市空間の変化と公園の変化を対応させることができなかつた。インフラとしての公園の存在価値と空間デザインのあり方を論じるためには、これらは今後検討を要する課題である。

参考文献

- 1) (社)日本都市計画学会編：都市計画マニュアル(都市施設、公園緑地編)、丸善株式会社、pp21、2002
- 2) 小野良平著：震災復興期に至る公園設計の史的研究について、造園雑誌 53 (5)、pp73、1990
- 3) 石川幹子著：ニューヨークにおけるセントラル・パークの 19 世紀末以降の変遷と再生に関する研究、土木史研究 No.11、pp37-48
- 4) 川本昭雄著：隅田公園（東京公園文庫 40）、東京都公園協会監修、郷学社、1981、第一版、
- 5) 復興事務局、「帝都復興事業誌建築編・公園編」、1931
- 6) 都市公園(Public Parks magazine)、東京都公園協会、1983、1996、1997
- 7) 越沢明著：東京都市計画物語、筑摩書房、pp39-52
- 8) 日本住宅地図出版株式会社編：ゼンリン住宅地図、台東区、墨田区、1978 年から 2002 年まで
- 9) 東京都航空住宅地図、1974、1985
- 10) 隅田の今昔(写真カタログ)、墨田区緑図書館編
- 11) 前掲書 5)、pp14
- 12) 前掲書 5)、pp47
- 13) 前掲書 4)、pp21-22
- 14) 前掲書 7)、pp39、45
- 15) 前掲書 8)、2002 年
- 16) 前掲書 5)、pp90
- 17) 前掲書 6)、1997 年、pp37
- 18) 前掲書 6)、1996 年、pp37-38
- 19) 宮城俊作、「ランドスケープデザインの視座」、2001、学芸出版社、p158